

令和5年度
平和大使長崎派遣事業報告書

はばたけ千羽鶴

平和という名の

青空へ

松 戸 市

目 次

平和大使長崎派遣事業にあたって	1
世界平和都市宣言	2
平和大使の役割	3
平和大使長崎派遣募集要項	4
平和大使名簿	7
平和大使長崎派遣行程	8
平和大使長崎派遣帰庁報告会	17
平和の集い	18
平和大使の報告	
「長崎派遣で学んだ事」	佐方 知樹 21
「私がすべきこと」	須志原 理奈 25
「長崎に行き考えたこと」	七條 圭都 28
「語り継がなくてはならない事」	千葉 皇毅 31
「長崎派遣を終えて」	清水 優輝 34
「長崎に行って学んだこと」	金谷 直佳 37
「長崎を最後の被爆地に」	中澤 莉沙 40
「長崎派遣を終えて」	河村 榛己 43
「長崎派遣を終えて」	玉木 隆太 46
「長崎派遣で感じたこと」	平山 優奈 49
「長崎派遣を終えて」	大谷 倫子 54
「写真の語り部」	高橋 凜 57
「長崎派遣で学んだこと」	高橋 由佳梨 59
「私に出来ること」	吉田 心美 63
「長崎派遣を終えて、今思うこと」	宇戸谷 茉瑚 66
「決して忘れてはならない夏の日」	越智 海成 68

「当たり前がある幸せ」	ふじかわ まりか 藤川 真莉花	．．．．．	71
「78年前の想いを引き継いで」	さとう えりか 佐藤 衿花	．．．．．	74
「長崎で学んだこと」	くらしな しづき 倉品 詩月	．．．．．	77
「平和の大切さ」	ほんだ まり 本田 真理	．．．．．	80
「伝えることの大切さ」	たじま こうが 田嶋 孔賀	．．．．．	83
「同じ過ちをくり返さないために」	こぐち りこ 小口 莉子	．．．．．	87
派遣後の活動について	．．．．．	．．．．．	91
長崎平和宣言（令和5年8月9日）	．．．．．	．．．．．	95
歴代平和大使名簿	．．．．．	．．．．．	103



～ 平和大使長崎派遣事業にあたって ～

本市は、「世界平和都市」を宣言して以来、毎年様々な平和事業を展開しており、その一つとして「平和大使長崎派遣事業」を実施しております。この事業は21世紀を担う市内中学生を原爆投下の地である長崎市に「平和大使」として派遣するもので、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを学び、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育んでいただくことを目的としております。平成20年度に始めた本事業は今年で第14回目を数え、延べ284名の平和大使を派遣しました。

さて、今年の8月9日、出島メッセ長崎において「被爆78周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」が開催されました。

式典は、平和公園で開催される予定でしたが、台風6号の接近に伴い屋内施設である「出島メッセ長崎」において、被爆者代表と主催者(長崎市)のみ参列する形式による縮小開催となりました。長崎を訪問した大使たちは、ホテルの会議室で中継を視聴しながら原爆犠牲者の冥福を祈り、黙とうを捧げました。

そして、長崎市長は式典の「長崎平和宣言」の中で、対決ではなく対話によって核兵器廃絶への道を着実に歩むよう核保有国と核の傘の下にいる国のリーダーに求めました。また、被爆者がいなくなる時代を迎えようとしている中、本当の意味での「抑止力」をこれからも持ち続けられるか、そして核兵器を廃絶できるかは、私たち一人ひとりの行動にかかっていることを訴えました。

被爆者の平均年齢は今年初めて85歳を超え、このままでは被爆体験や戦争体験の記憶は風化してしまう恐れがあります。悲惨な記憶を決して忘れないために、そして戦争や核兵器の無い平和な未来を実現していくために、私たちは、直接体験談を聞くことができる最後の世代として真実をしっかりと引き継ぎ、若い世代に継承するということが使命であると考えております。

併せて、世界平和都市宣言における、世界の恒久平和の達成を念願するという理念から、世界各地で続く紛争に対しても目を向け、様々な角度から、広い視野を持った施策を行う必要があると認識しているところです。

本事業を通して、平和大使が長崎の地で学び感じた被爆の実相や平和の尊さを周りの人に伝え、一步ずつでも平和な世界、平和な未来に近づくことを願い、今後も本事業を実施してまいりたいと考えております。

～ 世界平和都市宣言 ～

我が国は、世界で唯一の被爆国である。

何人も平和を愛し、平和への努力を続け、常に平和に暮らせるよう均しく希求しているところである。

しかし、現下の国際情勢は、緊張化の方向に進み市民に不安感を与えている。

かかる状況に鑑み、松戸市は日本国憲法の基本理念である平和精神にのっとり、平和の維持に努め、併せて非核三原則を遵守し、あらゆる核兵器の廃絶と世界の恒久平和の達成を念願し、世界平和都市をここに宣言する。

昭和60年3月4日 松戸市

・ World Peace City Declaration

[英語]

March 4, 1985

In the past, our country has experienced the sadness from an Atom Bomb explosion.

This makes our nation determined that history will not be repeated.

All of us yearn for peace, continue making an effort to create peace, and wish that we all can live in a peaceful environment in the future.

However, presently around the world, international affairs are becoming increasingly tense and cause our citizens great concern.

In response to the present turmoil across the world, Matsudo City now more than ever, willfully observe the peaceful spirit that is the fundamental philosophy of the Japanese Constitution.

We will endeavor to maintain nationwide peace, comply with the three anti-nuclear principles and possess the desire to abolish all nuclear weapons and the accomplishment of permanent peace throughout the world.

Therefore, we now declare our city as the "World Peace City".

City of Matsudo

・ 世界平和都市宣言

[中国語]

日本是世界唯一的核弹受难国。

我们热爱和平、为和平而奋斗、切望一个和平的生活环境。

但是、当今国际关系仍然紧张、市民深感忧虑。面对动荡的世界、松戸市郑重宣告本市将遵循日本国宪法基本理念、

高扬和平精神、为保障和平而尽力、坚持非核三原则、为在地球上废除所有核武器、建立一个永久和平的世界而积极贡献力量。

～ 平和大使の役割 ～

- 1 松戸市世界平和都市宣言を知る。
- 2 松戸市の平和スローガンである「みんなで築こう世界の平和」という心を持つ。
- 3 平和への願いを込めた千羽鶴を作製して長崎に献呈する。
- 4 長崎を訪問するにあたって「原爆とはどんな兵器なのか」「戦争がどんなに悲惨なものなのか」などを学び、平和の大切さを認識する。
- 5 長崎市では「青少年ピースフォーラム」に参加して、全国の自治体及び地元長崎の青少年たちと一緒に平和について学び、語り合う。
- 6 長崎訪問終了後、感想や記録をまとめて報告する。
- 7 長崎訪問で経験したこと、思ったことなどを家族や友達などに伝えていく。

～ 平和大使長崎派遣募集要項 ～

中学生の皆さんへ

世界平和都市宣言事業 第14回「平和大使長崎派遣」大使募集要項



松戸市では、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育んでもらうため、長崎市で毎年開催される「青少年ピースフォーラム」へ参加する中学生を募集します。

【 平和大使とは 】

・ 「平和大使」は、松戸市の世界平和都市宣言に基づき、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて研修や長崎派遣を通じて知識を深め、そこで学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていくことが期待される人です。

【 対象 】

・ 市内中学校に在学する生徒で、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて学ぶ意欲があり、裏面の日程にある事前研修、派遣、事後研修全てに参加できる人。
※既に平和大使として長崎へ派遣された方は、対象となりません。

【 定員 】

・ 原則各学校1名とし、全学校で22名（申込者が定員を超える場合は抽選とします。）

【 費用 】

- ・ 市の負担 松戸市から長崎市までの往復交通運賃、宿泊費、長崎市内移動バス電車運賃
8/7(月)の夕食、8/8(火)～9(水)の3食、8/10(木)の朝食・昼食
- ・ 自己負担 事前研修等にかかる会場(市内)までの交通費、8/7(月)の昼食 など

【 申込方法 】

・ 参加申込用紙に必要事項を記入して、任意の封筒に入れ学校に提出してください。

【 提出期限 】

・ 令和5年6月1日(木)までに学校へ提出

【 研修日程 】

1 事前研修

平和についてのオリエンテーションを行います。(自主学習)

7月17日(月祝) 9:30~12:30 結団式及び第1回オリエンテーション
 青少年ピースフォーラム等の内容説明
 7月30日(日) 10:00~15:00 第2回オリエンテーション
 戦争、原爆、平和についての自主学習

2 派遣研修

- (1) 場所 : 長崎市
 (2) 期間 : 8月7日(月)~8月10日(木) 3泊4日
 (3) 内容 : 青少年ピースフォーラムへの参加等

< 青少年ピースフォーラム >

8月9日(水)の平和祈念式典にあわせて、全国の自治体が派遣する青少年と長崎市の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として長崎市が実施しています。主な内容として、平和祈念式典への参列、被爆体験講話、平和関連施設見学、平和学習会への参加を予定しております。



過去の青少年ピースフォーラム
 ※現地開催の様子

(4) 「平和大使長崎派遣」 日程表(仮)

8/7(月)	松戸市役所 → 羽田空港 → 長崎空港 → 長崎市内ホテル(自主学習)	
8/8(火)	午前	平和案内人のガイドによる被爆建造物見学 < 場所: 原爆落下中心地公園、城山小学校など >
	14:00~15:15	開会行事(被爆体験講話など) < 場所: 平和会館ホール >
	15:25~18:00	参加型平和学習(屋内) < 場所: 平和会館ホール > ごちんまりフィールドワーク(屋外) < 場所: 原爆資料館周辺 >
8/9(水)	午前	平和祈念式典への参列 < 場所: 平和公園または中継会場 出島メッセ長崎 >
	14:00~16:00	参加型平和学習(屋内) < 場所: 出島メッセ長崎 >
8/10(木)	ホテル → 長崎空港 → 羽田空港 → 市役所帰庁 → 帰庁報告会 → 市役所解散	

(5) 同行者 松戸市職員4名、添乗員1名

3 事後研修

8月28日(月) 平和大使長崎派遣報告書(作文)の提出

派遣研修で学んだ成果を生かし、戦争や核兵器の悲惨さや平和の大切さを伝えるため、平和大使長崎派遣報告書を作成します。

11月下旬(予定)「平和の集い」へ参加し、報告会を行います。

～ 平和大使名簿 ～

さかた さとぎ 佐方 知樹	(第一中学校 1 学年)
すしはら りな 須志原 理奈	(第二中学校 2 学年)
しちじょう けいと 七條 圭都	(第三中学校 3 学年)
ちば おうぎ 千葉 皇毅	(第四中学校 1 学年)
しみず ゆうき 清水 優輝	(第五中学校 1 学年)
かなたに なおか 金谷 直佳	(第六中学校 1 学年)
なかざわ りさ 中澤 莉沙	(第六中学校 1 学年)
かわむら はるき 河村 榛己	(小金中学校 1 学年)
たまき りゅうた 玉木 隆太	(常盤平中学校 1 学年)
ひらやま ゆうな 平山 優奈	(栗ヶ沢中学校 2 学年)
おおたに りんこ 大谷 倫子	(六実中学校 1 学年)
たかはし りん 高橋 凜	(小金南中学校 2 学年)
たかはし ゆかり 高橋 由佳梨	(古ヶ崎中学校 2 学年)
よしだ ここみ 吉田 心美	(河原塚中学校 1 学年)
うとや まこ 宇戸谷 茉瑚	(新松戸南中学校 3 学年)
おち かいせい 越智 海成	(金ヶ作中学校 3 学年)
ふじかわ まりか 藤川 真莉花	(和名ヶ谷中学校 2 学年)
さとう えりか 佐藤 衿花	(和名ヶ谷中学校 2 学年)
くらしな しづき 倉品 詩月	(旭町中学校 1 学年)
ほんだ まり 本田 真理	(小金北中学校 1 学年)
たじま くうが 田嶋 孔賀	(光英VERITAS中学校 2 学年)
こぐち りこ 小口 莉子	(専修大学松戸中学校 1 学年)

～ 平和大使長崎派遣行程 ～

7月17日（月祝）

◆結団式・第1回オリエンテーション〔市役所議会棟3階特別委員会室〕

結団式では各学校から選ばれた平和大使に任命証が交付されました。

オリエンテーションでは、一人ひとり大使としての抱負を発表しました。また、事業の目的や大使の役割を確認し、青少年ピースフォーラムの説明を受け、先輩大使に貴重な体験談を話していただきました。



〈任命証交付〉



〈平和大使長崎派遣結団式〉



〈オリエンテーション〉



〈先輩大使の体験談〉

7月30日（日）

◆第2回オリエンテーション〔市役所議会棟3階特別委員会室〕

長崎派遣に向けて、リーダー・サブリーダーや派遣中のルールなどの必要事項を決め、コミュニケーションを図りました。

午後は2つのグループに分かれ、グループワークを行いました。「争いの原因」と「争いをなくすためにはどうしたらよいのか」をそれぞれに考え、意見交換をしました。そして、グループごとに意見を集約し発表をしました。

長崎派遣のスケジュールと注意事項を確認した後、原爆資料館に献呈する千羽鶴を作るため、大使たちが折った鶴と市民の方々が折ってくれた鶴を平和への願いを込めて一つひとつ糸でつないでいきました。

そして、千羽鶴に添える標語をみんなで話し合っって考え、

「はばたけ千羽鶴 平和という名の 青空へ」

に決定しました。



〈役割決めの様子〉



〈グループワーク〉



〈グループ発表〉



〈千羽鶴の作製〉

8月7日（月）

◆9：30 長崎市へ出発

松戸市役所に集合し、出発式を行い、家族や関係者に見送られてバスで羽田空港に向かいました。13時05分に羽田空港を出発し、14時30分に長崎空港到着、バスで長崎市内の宿泊ホテルへ向かい、16時頃ホテルに到着しました。



〈出発式〉



〈羽田空港出発ロビー〉

◆16：40 長崎県防空本部跡(立山防空壕)見学

16時40分にホテルを出発し、立山防空壕見学へ向かいました。

壕内には当時この場所にいた方の証言や当時の電報が記載されたパネルや、ここで発見された原物資料が展示されており、原爆投下直後の混乱の様子が伺えます。



8月8日（火）

◆9：00 被爆建造物見学

朝8時30分にホテルを出発し、被爆建造物見学へ向かいました。

見学は2班体制で、それぞれボランティアの平和案内人によるガイドのもと、原爆落下中心地、城山小学校、平和公園を約2時間かけて歩いて巡りました。平和案内人の方が、当時の悲惨な様子をわかりやすく説明してくれました。実際に被爆建造物を自分の目で見ることで、被害がどれほどのものだったのか伝わってきました。



〈原爆落下中心地碑〉



〈浦上天主堂遺壁〉



〈被爆校舎（城山小学校平和祈念館）〉



〈平和の鐘（平和公園）〉



〈平和祈念像（平和公園内）〉

◆12：30 山王神社 一本柱鳥居、被爆クスノキ見学

バスで山王神社に向かい、一本柱鳥居を見学しました。一本柱鳥居は、原爆投下により爆心側の左半分が吹き飛ばされたものの、奇跡的に右半分だけの一本柱の状態が残った鳥居で、強烈な爆風による被害の様子を見ることができます。また、大楠(被爆クスノキ)は原爆被災の貴重な遺構として、長崎市指定天然記念物に指定されています。



〈一本柱鳥居〉



〈大楠 (被爆クスノキ)〉

◆13：10 千羽鶴献呈 [長崎原爆資料館]

大使と松戸市民の思いをのせた3つの千羽鶴を長崎原爆資料館に献呈しました。



〈千羽鶴献呈〉



〈松戸市の千羽鶴〉

◆14：00 青少年ピースフォーラム(開会行事)参加〔長崎市平和会館〕

青少年ピースフォーラムには、全国から小・中・高校生が参加しました。

開会行事では、青少年ピースボランティアによる開会宣言、長崎市長挨拶の後、長崎原爆の被爆者である築城 昭平さんから被爆体験講話を聞きました。



〈被爆体験講話〉

◆15：15 青少年ピースフォーラム(平和学習)参加〔長崎市平和会館〕

続いて、青少年ピースボランティアの進行による平和学習に移りました。参加者全員がグループに分かれて、原爆資料館周辺を巡るフィールドワークを行った後に、スライド学習や戦争模擬体験を行い、被爆の実相を学びました。

また、令和5年9月23日(土)に長崎市で行われる『平和の^{ともしび}灯』で灯されるキャンドルに平和を願いながら絵付けを行い、1日目の青少年ピースフォーラムが終了しました。



〈フィールドワーク〉



〈戦争模擬体験〉



〈参加者を代表して修了証書授与〉



〈キャンドル絵付け〉

8月9日（水）

◆10：45 平和祈念式典〔中継視聴〕

「被爆78周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」参列の日を迎えました。

ホテル内で式典の中継を視聴しました。

厳粛な空気の中、式典が行われ、原爆投下時刻の午前11時2分、サイレンと長崎の鐘が鳴り響きました。原爆犠牲者のご冥福と世界の恒久平和を祈り、黙とうを捧げました。



〈ホテル内で式典中継を視聴〉



〈黙とうの様子〉

◆12：40 長崎原爆資料館見学

平和祈念式典後、長崎原爆資料館を見学しました。資料館には、原子爆弾の実物大模型や原爆の被害を受けた物品、被爆された方の写真など、資料がたくさん展示されており、改めて原爆の恐ろしさを実感しました。



〈原爆の被害を受けた物品など〉



〈原子爆弾「ファットマン」の実物大模型〉

8月10日(木)

◆10:00 報告動画撮影

台風の影響で当初予定していた長崎空港発の便が欠航となったため、福岡空港を経由する行程に変更しました。帰庁時間が予定より遅れることから、帰庁報告会が中止となったため、ホテルの会議室で報告用の動画撮影を行いました。



◆12:00 松戸市へ出発

4日間お世話になったホテルの方にあいさつし、バスで福岡空港へ向かいました。
16時45分に福岡空港を出発し、福岡を後にしました。
18時50分羽田空港到着。市の迎いのバスで、市役所へ向かいました。



～ 松戸市役所へ帰庁 ～

◆20:40 松戸市役所到着

松戸市役所に到着。みんな元気に帰ってくることができました。



〈青少年ピースフォーラム修了証書を手に市役所連絡通路で記念撮影〉



〈修了証書〉

～ 平和大使長崎派遣帰庁報告会 (YouTube 動画配信) ～

帰庁後に松戸市役所で帰庁報告会を開催予定していましたが、台風の影響で中止としたため、現地で報告動画を撮影しました。22人の大使それぞれが長崎派遣で学んだ事や感じたことを報告しています。



〈YouTube 動画 令和5年度平和大使長崎派遣 帰庁報告会〉



動画QRコード

～ 平和の集い ～

11月26日(日)

◆13:10 平和大使長崎派遣報告会〔市民劇場〕

「平和の集い」の中で、大使の役割を果たすべく、長崎派遣を通して学んだことや感じたことを、市民の皆様へ報告しました。

スクリーンに映し出した写真などに合わせて、事業の目的や大使の役割、結団式から長崎派遣、そして帰庁報告会までの流れを紹介するとともに、場面ごとに学んだことや感じたこと、今後の決意を伝えました。



今年で戦後78年を迎えました。私たちの周りでは、戦争を実際に体験した方々が高齢になり、少なくなっているため、直接お話を聞くことがだんだん難しくなっています。

しかし、戦争で命を落とした犠牲者や被爆者の方々の思いを無駄にしないために、そして今後の平和を実現していくために一番重要なことは、私たち平和大使を含めた未来を担う若い世代が、平和への関心を高め、その大切さを代々受け継いで行くことだと思います。

私たちは、長崎市で見て聞いて感じた戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さをたくさんの人に伝え、次の世代に、未来の人々に伝えていく活動をしていきます。

平和大使の報告

長崎派遣で学んだ事

松戸市立第一中学校 一年

佐方 知樹

僕は長崎派遣で感じたことや知ったことがたくさんあります。

他の学校の友が何をしてるかとか、長崎の料理はどんなものかとか、そういうことも知りましたが、やはり長崎では戦争と原爆の事を通して平和についてよく学びました。

それらは、大体二つに分けられます。

一つは見て学んだことです。

例えば、原爆落下中心地にあった浦上天主堂の壁の一部です。

一見普通に見えましたが、コンクリートがずれているのです。

これは原爆のとても強い爆風でずれたもので、これにより大抵の建物はくずれてしまいました。また、城山小学校は爆風でくずれていない数少ない建物で、今でもその一部が残っています。

その外見は、焼けこげて黒ずんでいました。中に入ると、建物の中のコンクリートの表面は一度溶けてでこぼこしていました。

また、焼けて死んでしま、た木の幹や次の日の、原爆資料館に家の壁にはしごと人影がし、かりと火をうけた写真がありました。

これは原爆の熱線による被害です。

原爆が爆破した後の数秒間、数百万度に達する火球が出現し、それに対峙した赤外線などが出て、一時は地面が四千度に至りほどずさまいもので、赤外線などが熱線です。

また、平和公園や原爆資料館で、放射線の被害を受けた人々の写真がありました。

これらが見て学んだことです。

原爆の被害を見て学ぶことができました。

二つ目は聞いて学んだことです。

特に二日目の青少年ピースフォーラムでのことで、まず被爆者の話を聞きました。

その人は、当時十八歳で夜勤のために寝ていたそう。今でも原爆で多くの物が一瞬でな

くな、たことが理解できないと言っていました。その人はその後、友人と共に爆心地とは反対にある病院に向かっ、ていて、放射線の被害をあまり受けなかったそうです。

その次にこざんまりフィールドワークというものをした後、戦争体験をしました。

空襲で少しずつ物を失い、原爆が残っていた大切なものがほとんどふきとんでしまいました。

その後、原爆の数をBB弾で表し、大きな缶に落として音で12520発という数を体験できました。

これが聞いて学んだ事です。

原爆の街や人命に関わる爆風、熱線、放射線という被害と、被害者が原爆を理解できないくらい一瞬ですべてがなくなること、戦争は少しずつ人を苦しめ、原爆が落とれてしまえばすべてなくなってしまうこと、そしてその原爆を超えた性能の物が世界に10000発以上もあるという事。

それらを長崎を通してより強く実感し、心に
刻むことができました。

私がすべきこと

松戸市立第二中学校 2年

須志原 理奈

私は、長崎に行く前、核兵器を甘く見ていました。しかし、長崎に派遣されて、核兵器の恐ろしさや、戦争の悲惨さを肌で感じる事ができました。遺体が道に置いてあったり、建物が壊れ、町が焼け野原になったりと、今では考えられないような光景が残さなくなってしまいました。被爆者にとってもつらい思い出の一部をたくさんの方々に伝えるために残してあります。そんな思いに全力で応えたいと、長崎に行って感じました。

長崎へ行って、一番戦争について肌で感じる事ができたのは、長崎原爆資料館へ行った時です。原爆資料館に入り、最初の方に時計がかかざってありました。その時計は、爆破時刻の午前17時02分でとまっていました。その時計が戦争や核兵器の恐ろしさについて物語っていました。文字盤は、"にや"に"に"に

曲がり、時計自体も壊さなくなっていました。時計だけでなく、かざらんでいる何枚もの写真の
らも、戦争の悲惨さをうかがうことが出来ました。熱線で焼けこげた小さな子供の遺体や
熱傷で背中一面が赤くなっていた少年、駅のホームで倒れる母子の遺体など、目をそむけたく
なるような写真がたくさんありました。何の
罪のせいも多くの人たちが次々に殺され、多くの
の悲しみが生まれる。そして、多くの人たちの
の幸福や人生をうばった。こんな戦争を二度
と起こしてはならないと改めて感じました。

私たちは、城山小学校にも行きました。城
山小学校の被害を受けた一部だけが残され、
建物内に入ると、原爆についての資料や、当
時の模型、亡くなった先生方の写真などがあ
りました。亡くなった先生方は、女性の方が
多く、また20さい以下の先生方も多くいら
っしゃいました。苦しい中でも、先生という
職務をまっとうしていた人たちが、たくさん
いると知って、胸を打たれました。

私は、何も無い日常にあきあきしていました。いつもと同じ時間に起き、そして学校に行き、授業をうけて、帰って寝る。こんな日常かともつまらなくて、退屈でした。しかし、長崎へ行き、こんな日常こそが平和なのだと感じました。何もなくておちついた日常は、私にとっては必要のないと思っていたものかもしれませんが、戦争の時代を生きていた人々にとっては、なくてはならない、一番欲しかったものだと気がかきました。

大切なものというのは、なくしてからでないと、その大切さに気がかたないことが多いです。そして、なくした時に後悔し、絶望を味わいます。なので、私は今を全力で楽しみ、過ぎたいと思いました。退屈な日々はこれからたくさんあると思いますが、その中で自分で楽しめることをつくり、生きがいを見つけ、平和な日常にありかたみを持って、過ぎたいと思います。

長崎に行き考えたこと

松戸市立第三中学校 3年

七條 圭都

「戦争を知らない子供たち」という歌を知っているだろうか？この歌は1970年に精神科医であり、臨床心理学者でありミュージシャンである北山修さんによつてつくられたものである。現在77歳である北山さんが当時、戦争を知らないということで大人からなじられ、戦争を知らない世代でも世界をより良くするために活動をしているという思いを込めてつくられたそうだ。

77歳と高齢の方も戦争を知らず、その子供世代である僕たちの親はもっと知らず、僕たち世代は教科書や映像でしか知らず、「戦争を知らない子供たち」を知らない子供たちである。

アメリカで、原爆の父と呼ばれる「オッペンハイマー」と「バービー」を掛け合わせた映画宣伝用の広告が発表されたが、異論を唱

えたのは日本だけでアメリカは後からソーシャルメディアを通じて謝罪があったのみであった。これには被害者側と加害者側の考えの相違に違いがないが、両国の間での原爆に対する教育や、他者の心理を読みとる想像力の欠如にあると考える。

山王神社への階段を登りきると、遺構として残る一本柱の鳥居があった。1945年8月9日の原爆投下による爆風を受け倒壊をまぬがれたものであるが、78年たった今でも住宅街の中にたたずんでいる。神社の境内へ入ると、同じく遺構である大楠が被爆後枯れ木同然となったことをものともせず、台風が近づいてきている合間の青空に向かって、青々とした葉をしげらせ、力強くのばしている。その姿は生命力にあふれていた。

そしてそれは、戦争から復興した長崎のまちと重なり、僕にとってこの派遣でのバに残る光景だ。

戦争体験者の方々の高齢化が進み、僕たち

が直接声を聞く機会を与えられた最後の世代である。世界唯一の被爆国として核というものについての発言を世界に向けてしなければならぬと思う。

そのために僕たちも他国のことをよく理解し、知らないと投げ出すことがないよう、学び続けて行きたいと思う。

「語り継がなくてはならない事」

松戸市立第四中学校 1年

千葉 皇毅

僕は、松戸市立第四中学校の代表生として長崎に派遣されました。

そのため学校の友達や家族などに、平和について学んだことをフィードバックしなければいけないなど大使としての使命を実感しています。

今年は、台風の影響で中止になった平和事業もあり、残念だなと思う反面、沢山吸収しようという前向きな気持ちで臨みました。

特に僕が絶対に語り継がなければいけないなと感じたことは、平和や沢山の尊い命の重さ、核兵器・戦争の非惨さです。

誰もが忘れてはいけない、あの日、8月9日午前11時2分、たっ、た1発の原爆が町を焼け野原にした。死者73,884人、重軽傷者74,909人もの被害を及ぼした。表面温度が3,000~4,000度、被爆地から1km以

内で被爆した人は、100%亡くなると言われている事から原爆の恐ろしさを改めてすごく実感しました。もし、希跡的に生き残ったとしても、がんや白血病、脱毛というすごく辛い後遺症が残るので、すごく残酷だなと思いました。今は長崎に落とされた原子爆弾、「ファットマン」より遥かに性能が高い核兵器の数が世界に12,520発あるので核兵器廃絶に協力したいなと心から思いました。

青少年ピースフォーラムでは戦争の疑似体験を行い、徴兵制や配給制度が始まり自分の大切な物、大切な事、大切な人が全て奪われてしまい結局最後に残るのは、何にもないという現実も思い知らされました。

被爆者の実体験話はものすごく残酷でした。道端には死体がゴロゴロしていたなどとても残酷ですが貴重なお話を聴くことができてとても良かったです。被爆者の平均年齢が85歳を超えたという事から戦争をもう二度と繰り返さないためにも、長崎を最後の被爆地に

するためにも平和を語り継いでいくのが平和大使だと思います。

「平和」は当たり前ではありません。

誰かに任せるのではなく、一人ひとりが平和について考え、行動しなければならないのです。「戦争」が人によって起こったものならそれをなくす事ができるのも人だけです。

「戦争」を体験した方も少しずつ減ってきて今や本物の戦争を知らない人がほとんどです。戦争を知らない僕が何を言おうと軽い意見に聞こえてしまいかもしれません。

「忘れない」、「忘れさせない」努力をしなければなりません。

僕は、これからも、積極的に体験者の話を聴いたり、慰霊祭等の平和事業に参加して、

「戦争」は永遠に繰り返してはならない事を伝えていきたいと思います。

いつレか世界中全ての人が、「戦争」は、いけないものだという意識を持つようになる事を願いながら。

長崎派遣を終えて

松戸市立第五中学校 1年

清水 優揮

8月9日、11時2分、長崎に1つの原爆が落とされました。上空9600メートルで爆発した原爆は辺りを激しい閃光でつつみ、3000～4000度の熱で覆いつくしました。死者は73884人、重軽傷者は74909人にもなりました。この原爆は、一瞬のうちに様々なものを奪い、長崎の人々の心に深い傷をあたえました。

僕は、長崎平和大使派遣で見て感じて印象に残ったことが5つあります。1つ目は、店や学校などが建ち並び発展していた長崎の地が爆風などによって一瞬にして更地になってしまった写真を見たことです。僕はこの写真を見て「こんなにも発展していたのに一瞬で原爆は全て奪ってしまうのか」と衝撃を受けました。2つ目は、被爆者である築城昭平さんの話を聞いたことです。当時18歳だった築城さんは、長崎師範学校在学中、軍需工場へ

学徒動員され、爆心地から18キロメートルの学校の寮で、当日の夜勤に備え、睡眠中に被爆して全身火傷を負いました。特に左腕と左足先は重傷だったそうです。僕はこの話を聞いてとても悲しく心に1つの「矢」を打たれたような気持ちになりました。3つ目は、生き残ったのに今もなお後遺症に苦しんでいる人がいることを知ったことです。被爆した方々は原爆白内障、小頭症、白血病、癌などの後遺症に苦しめられていることを知って心が痛くなりました。4つ目は、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で見た被爆者の方々が書いた体験記を見たことです。何百何千もの被爆者の方々の体験記を見ることで、その時のことが鮮明に読みとれるので見た時はゾッとしました。5つ目は、青少年ピースフォーラムで行われた戦争体験です。これは、一人一人大事なものをメモに書いて戦争が進むにつれ、なくなってしまうという体験です。最初はたくさんあったのに、戦争が進むにつれどんどん

人なくなり、最終的に全てはなくなっていました。この体験で本当に何もかも奪われた気持ちになっていき、当時の人々の悲しさが身をもってわかりました。僕はこの長崎平和大使で「平和の尊さ」について学びました。しかし、いま世界には約12500個もの核爆弾があります。この核爆弾を使わせないこと、そして、「平和」を守っていくために「平和の尊さ」を伝えていきます。皆さんで協力して「恒久平和」を作っていきましょう。

長崎に行。て学んだこと

松戸市立第六中学校 1年

金谷 直佳

平和大使長崎派遣を終えて、戦争と核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを改めて実感しました。

長崎は、たった1発の原子爆弾により、多くの被害を受け、たくさんの方が命を落としました。

私は、戦争と核兵器の恐ろしさや平和、命の尊さを簡単に思っていたり、具体的な被害についてあまり知りませんでした。今回の活動で、長崎市内の原爆資料館や平和公園、城山小学校などを巡り、原子爆弾の熱線によって火傷をおった人々の写真や、変わり果てた長崎の町の写真等を見て、当時の被害などたくさん知りました。

私が、いろいろなところを巡ったり、青少年ピースフォーラムに参加したうえで、特に印象に残ったことは3つあります。

一→目は、青少年ピースフォーラムで行われた築城昭平さんの被爆体験講話です。当時18才だった築城さんは、学徒動員により軍需工場で働いていました。当日の夜勤にそなえて寝ていたところ被爆しました。爆心地から、1,8kmの位置にある学校にいたため被害が小さく、築木さんは、熱線で全身火傷したそうです。築城さんは、「二度とこういうことが起こらないでほしい。長崎を最後の被爆地にしてほしい」と、強く語られました。

二→目は、熱線により火傷を負った多くの人は、水を求めて不衛生な川に入り、亡くなったという事です。火傷を負った多くの人は、とにかく「水、水がほしい」と、ずっと言っていたそうです。

三→目は、原爆資料館で見た、当時の貴重な資料でした。被害を受けた長崎の町から見たかった、割れたガラスによりかぶれたワイシャツや血痕の残る戦闘服、3才の子供の防空頭巾など、当時の状況を感じられる物が多い

山あり、あまいの悲惨さに言葉を失いました。

現在、世界には約12,520個の核兵器があるそうであり、核兵器の数を減らすためには、被害を伝え続けることが大切だと思います。

私は、核兵器の使用による被害を恐ろしさを伝え続けることが核兵器を削減し、戦争を減らすことにつながると信じています。人類の真の平和につながると信じて私は、伝え続けていきます。このような貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

長崎と最後の被爆地に

松戸市立第六中学校 1年

中澤 莉沙

私は、この四日間を通して、私達が生きている地球の尊さを改めて感じました。核兵器のおそろしさや、戦争のこと、被爆者の方の気持ちのこと、たくさん学んできました。

私は長崎に行って学ぶ前は、原子爆弾の事は、まったく知りませんでした。しかし、原爆資料館や、青少年ピースフォーラム、平和公園、城山国民学校（小学校）で資料や、映像、写真などを見て、たくさんの事を学ぶことができました。その中でも、衝撃的だったものが、二つあります。

一つ目は、原爆資料館で見た、爆心地より約800メートルの坂本町山王神社近くの民家にあった柱時計です。この柱時計は、11時2分で止まっているのです。これは、原子爆弾によりおこされた熱風の速さと脅威をよく表していると思います。800メートルも離れて

いるにもかかわらず、落ちた時刻ぴったりに止まっているこの時計を見た時、とても虚しく、そして悲しくなりました。みなさんは、想像できるでしょうか。とても強い熱風を。

二つ目は、爆心地から約200メートルの民家の屋根にあった瓦です。この瓦は、熱線により、表面が泡立っているのです。実際にさけることができ、熱線にもとても強い威力があったのだなと思いました。他に、熱線による被害で、鉄骨に、溶けてしまった頭蓋骨が付着している、なんともむじいふうなものも展示されていました。

私は、このふうな展示品以外にも、たくさんおどろきました。この二つがとても衝撃的でした。

今、この地球はたくさん問題を抱えています。地球温暖化や、SDGs、核兵器、戦争などいゝ何が起こるか分かりません。しかし、私たちがたくさん学び、後世に伝えることにより、一つずつ問題はなくなっていくと

思います。そして、核兵器による長崎、広島
の悲劇を二度とくり返さないように声をあげ
ていくことが大事だと思います。この四日間
で学んだことを、人生の糧とし、伝え続けて
行こうと思います。長崎と最後の被爆地にと。

長崎派遣を終えて

松戸市立小金中学校 1年

河村 榛巳

昭和20年8月9日午前11時2分。

長崎県に1つの屑弾が落とされた。約7万4000人の人々が被爆し、命を落とした。当時、城山国民小学校は爆心地から500メートルしか離れていなか。たので、校舎など敷地内にいた教職員や動員学徒ら130人超が死亡。自宅などにいた児童約1500人中、約1400人も犠牲になったとされている。そのまま命を落としてしまった人もいるが、生き残った人々も多くいる。被爆を乗り越え生き残った人々も、脱毛、発疹などの症状が起きる「急性障害」、白血病、がんなどの後遺に悩まされている。命を落としてしまった人もいるし、今なお苦しんでいる人もいる。

原爆は多くの人々の命を奪い、同時にたくさん建物を破壊している。浦上天主堂という建物は、浦上のカトリック信徒を中心に、

30年の歳月をかけて赤煉瓦を一枚一枚と積みあげて大正14年に完成し、双塔の高さが26メートルに及び東洋一を誇っていたが、爆心地から約500メートルという近い距離にあり、ここも一瞬に火柱は落ち、わずかに赤煉瓦の堂壁を残して壊滅し、さらに夜に入って炎上した。西田三郎、玉屋房吉の二人の神父と、奉仕作業をしていた信徒十数人が天主堂と運命をともにし、また、堂内に保管中の非常米2,482俵と素麺等約1,000箱が焼失した。被爆者の方の体験講話などを聞いて、僕は、戦争は無くなつて欲しいと思つた。「戦争が無くなつて欲しい」と、言うのは簡単だ。だが、実際に行動に表すとすると難しいと思う。「戦争は何も生まない」と僕は思う。それは誰もが知っているはずなのに、未だに戦争は起こり続けている。

世界には、12520発もの核兵器が存在する。アメリカがロシアなどがその大半を保有しているから、もしもロシアとアメリカが

対立してしまったり。世界が滅亡してしまいう
可能性も低くはないと思う。核兵器を使わな
くても、保有しているだけでそれは平和では
ない。核兵器を持たない事が平和への第一歩
となるだろう。本当の平和が訪れていてくれ
ることを願っている。

たとえば、僕たちが今完璧な平和な世界を創
れなか、たとしても諦めず、未来へと語り継
ぐことが大切だと思う。当たり前前に生きてい
る、このような日常が人には大切なことだと
実感した。このような日常生活を続けていく
ことが平和への第一歩だと思っている。この
体験を活かし、二度と戦争を起こさないため
に平和な世界を創る努力をしようと思う。

長崎派遣を終えて

常盤平中学校 1年

玉木 隆太

僕は、今回の平和大使長崎派遣で改めて、平和の尊さについて知ることができました。そう感じた瞬間は四日間派遣の中で数えきれない程ありましたが、特に心に残ったのは被爆体験講話での築城昭平さんの話の時と青少年ピースフォーラムでの戦争疑似体験です。

被爆体験講話での築城さんの話は僕の想像をはるかに超える壮絶さでした。原爆が投下される前のこと、投下された8月9日のことなどをわかりやすく話してくれました。被爆された方たちが高齢化している今、あと何年こうして直接体験談を聞くことが可能かと考えると凄く貴重な時間でした。

そして、青少年ピースフォーラムでの疑似戦争体験では最初に自分の大切な人やものなどをメモ帳に書いて、時間が経つにつれて様々な事件が発生し、戦争が起こるとびれだけ

自分の大切なものが失われていくかを知り、戦争は絶対に起こしてはいけないと深く心に刻みました。

今、日本は一見安全そうに見えます。ですが、地球全体を見てみるとどうでしょうか。地球には今、12,520発もの核兵器があります。もしもその核兵器が誤って日本に向けて発射されてしまふ、たゞどうな、てしまふのでしょうか。現在世界には長崎に投下された原爆の数千倍もの力を持つ、た核兵器もあると言われている。そんなものが日本に投下されたらおそろしく日本はあとかたをなく消えてしまふでしょう。ですから僕は平和祈念式典で鈴木市長がおっしゃったようにこの地球から全ての核兵器を撤廃しなくては本当の安全はおとずれないのだと思いました。

今日本の平和はアメリカの核の力で守られていて力の均ここのために核兵器が必要という意見もあります。しかし、唯一の被爆国である私たちが日本人が核の恐ろしさを伝えなくな

、てしま、たさどうな、てしまうのしょうか。被爆者の方モ少なくな、てきているので、核兵器を撤廃しなくてはならないことを私たちが訴え続けなければならぬのだと思います。

長崎派遣で感じたこと

栗ヶ沢中学校 2年

平山 優奈

第二次世界大戦末期の1945年8月6日午前8時15分、広島に一発目の原子爆弾が投下されました。1945年末までに約14万人が亡くなった惨劇はこの3日後におこりました。8月9日午前11時2分、長崎に2発目の原子爆弾が投下されました。死者約7万4000人、負傷者約7万5000人にのぼります。その6日後、日本は戦争に負け、終戦となりました。私は、戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさ、平和の尊さを学び、周囲の人に伝える「平和大使」として、長崎に8月7日から8月10日の四日間派遣されました。

長崎では、平和案内人による被爆建造物ガイド、原爆資料館の見学、青少年ピースフォーラムへの参加をしました。その中で私が印象に残った二つのことをお話しします。一つ目

は、城山小学校にある「嘉代子桜」です。城山小学校は爆心地から500メートルほど離れた場所に建てられており、当時城山小学校にいた学校職員、挺身隊、学徒報国隊など152人のうち、132人が亡くなりました。その中に林 嘉代子さんという当時15歳の少女がいました。嘉代子さんは原爆投下当時、城山小学校で働いていました。そして、11時2分長崎に原爆が投下されました。その日嘉代子さんが帰ってくることはありませんでした。翌日から嘉代子さんの母、林 津恵さんは毎日嘉代子さんを探し続けました。兵隊に叱られたことも度々ありましたが、「生きてまた愛娘に会いたい」という一心で探し続けました。そして、探し始めてから21日目、嘉代子さんは瓦礫の中で焼けた遺体となって発見されました。津恵さんは変わり果てた娘の遺体を運び、運動場の片隅で火葬しました。私はこの話を聴いている最中、あまりの酷たらしさに言葉が出ませんでした。嘉代子さんや原爆で亡くなった人

々は、国のために身を粉にして働いたのに、最後はこんなに無惨なものだったのです。原爆で生き残った方は、津恵さんのように信じられない現実を押しつけられ、心に深い傷をおいました。そして、戦争が終わってしばらくたった頃、津恵さんは、桜が好きだった嘉代子さんと原爆の犠牲となった人々を偲び、城山小学校に桜の植樹を訴えました。ですが、当時は原爆のあとには草木が生えないという噂があったため反対されました。しかし津恵さんは「嘉代子や女学生の魂が立派に桜を育ててくれると言い切り、1949年に50本の桜が植樹されました。その後、桜は原爆に負けず、立派に育ち、今でも美しい桜の花を咲かせています。

二つ目は、青少年ピースフォーラムの戦争疑似体験です。青少年ピースフォーラムは、被爆の実相や平和の尊さを学習し、平和意識の向上を図るプログラムです。青少年ピースフォーラムでは、被爆者の話、戦争疑似体験、

原爆の概要、「おちんまりフィールドワーク」の四つの平和学習をしました。その中で私は戦争疑似体験が一番印象に残りました。まず始めに大切なものカードを作ります。人やペット、ものや場所を一枚につき一つ書きます。書き終わった後、疑似体験が始まります。明りが消され、暗い室内で空襲警報が鳴り響きました。それが鳴り響くたびに、少しずつ生活に制限がつくようになりました。電子機器が使えなくなり、自由な外出ができなくなりました。戦争真っ只中になると18歳以上、60歳未満の男性が兵隊として兵に出されました。私の手元のカードは次々に奪われていきました。そして、8月9日午前11時2分。原爆が投下されました。原爆が投下された後、私の手元には一枚もカードが残っていませんでした。それなのに自分の命だけが今も残っているという現実には嫌悪感を抱きました。でも、それと同じくらい失ったものの存在がどれほど大切なもので、どれほど大きな物なのかを知り

ました。

私は、この派遣を通じてたくさんのことを学びました。人々の自由を次々に奪った戦争を、一瞬にしてたくさんの命を奪った原爆を忘れることなく、長崎を最後の被爆地にするため、平和大使として語り継いでいきます。

長崎派遣を終えて

六実中学校 1年

大谷 倫子

私は、実際に長崎に訪問したことで、多くのことを学べたと思います。その中でも一番衝撃だったことは、長崎の平和記念資料館で見た写真や、展示物たちです。熱線で、黒コゲにな、た赤んぼりの写真や、大ヤケドを負、たりして出来たケロイド、衰弱した人の姿など。展示物であ、たら、被爆した時刻で止ま、ている、ふりに時計や、腕時計、被爆者の頭蓋骨がく、ついている鉄かぶとなどどれも、自分が被爆した現場にいたらと思うと、とても恐ろしい事ばかりでした。

私は、もし自分が住んでいる街で写真のようケロイドが残、たりしている人を見て、「絶対、に差別や偏見なんかを持たない！」とは、言いきれる気がしませんでした。そしてそんな事を考えている自分の醜さにも腹が立ちました。

青少年ピースフォーラムで聴かせていただいた築城さんの、被爆体験講話では、築城さんは、

「神様が助けてくれていつの日か、日本がきくと勝つ。」

と思っていたそうです。

築城さんは、爆心地から1.8kmはなれた所で被爆し、家族や家が無事かを見に行く最中では、黒コゲの死体や、ヤケドで顔や背中が真っ赤になっている人がたくさんいたそうです。そして、家があったはずの場所に行くとそこには、家は崩れ果てるのは家族の死体だけだ、たとのことでした。

そして、悲しいことに、被爆者の方々は、被爆をしていない方々に、差別や偏見を持たれてしまったそうです。差別や偏見は、とても酷い事なのですが、私は絶対に差別などをしてはいけないということは、不可能に近いのではないかと思います。これは、とても醜く、酷い事なのですが、同時に、少し、仕方がないので

ないかとも思っ、てしまいました。だが、少しでもその差別や偏見が無いようにすることは可能なのではないかと思う。

人は、自分がよく知らない分からないモノが、怖い、恐ろしいと思っ、てしまうから、差別や偏見があるのだと思う。だから私は、戦争や原爆がなくなり、その被害にあ、た人の事をも、と知り、分かり合えれば、差別や偏見が無くなるのではないかと、私はこの長崎派遣の三日間で感じました。

写真の語り部

小金南中学校 2年

高橋 凜

私はネットで原爆の資料を検索することがあります。写真も映像も多く出てきても、ほとんど白黒で、現実味がありませんでした。それが、長崎原爆資料館や、長崎原爆死没者追悼平和祈念館を見ていくことで、段々とパズルのように被爆者の痛み、心情、崩壊した日常が脳内に現れていきました。映像には色がつき、写真は動き出す。た、た数秒で7万4千人の主人公が命を落とし、7万4千人が重軽傷を負う。生き残、た人も地獄を味わう。写真では到底現世そうにない苦しみに、初めて見た時はカメラを構える気力も起きませんでした。今の自分には、まだこれを写すことはできないと思、たからです。

私の将来の夢は写真家です。いつか、広島にも訪れて、もっと知識を付けて、私が見たこと、聞いたこと、感じたことを、自分の味

である写真と一緒に見ず知らずの人にも、身
近な人にも語り継いでいきたいです。

「話さなければ、消えてしまう。語り継がな
ければならない。」

この言葉が永遠に続くように、心に刻み込ん
で生きていきたいです。

長崎派遣で学んだこと

松戸市立古ヶ崎中学校 2年

高橋 由佳梨

11時2分。長崎の原爆資料館には、11時2分の針を指したまま止まって動かない、1つの柱時計があった。他にも、熱線の直射を受けた部分が焼け焦げている作業服。さらに、私たちと同じ“人間”の悲惨な姿を示すたくさん写真たち・・・

私が長崎へ行って感じたことは、戦争、原爆、核兵器の恐ろしさです。その中でも私が特に印象に残ったことは、“水”についてです。今、私たちが当たり前のように飲んでいる水。ですが、原爆が落とされてからは、水が飲めたくても飲めない日々。当時9歳で被爆した山口幸子さんは、当時のことをこのように証言しています。

「のどが乾いてたまりませんでしたので、水をくみにいったら、油のようなものが一面に浮いていました。それは空から降ったものだ

そうです。(中略)どうしても水が欲しくてたまらず、とうとうそれを油の浮いたまま飲みました。」

水がある川などには水を求めてやってきた多くの人々で埋めつくされ、証言のように油のようなものが一面に浮いていたそうです。今の私ならば、油が浮いた水は飲みたくない。でも、それを飲もうと思えてしまうくらい、当時は大変だ、たんだなと感じました。

また、青少年ピースフォーラムでの被爆体験講話で、実際に被爆された築城昭平さんは、「戦時中のごはんはかぼちゃしかなかった。」とおっしゃっていました。私たちは今、一日三食栄養バランスを整えてごはんを食べているのに、当時はかぼちゃしかなかく、他の食べ物も食べられなかったそうです。

他にも、原爆資料館には真っ黒に炭化したお米もありました。

長崎に原爆が落とされ、被害を受けた人の数は、死者数・重軽傷者数いずれも約7万4

千人です。この数字の中には、放射線による被害で体のいろいろな細胞が破壊され、無傷であっても苦しんでいた人が多くいます。人体におよぼす害は、爆発のときだけでは終わらず、身体の奥深くまで傷つけた放射線による症状で、今もなお苦しんでいる人がいます。

そして、“核兵器”。今現在、世界には、12,520発もの核があります。この数はとても多く感じますが、前年に比べると200発減っています。「200発“しか”減っていないの？」と思いましたが、これからも減っていくことを願いながら生活していきたいなと思いました。

長崎へ行って、戦争のことについて学んだからには、周りの人へ伝えていかなければいけない。被爆された方の平均年齢が今年85歳になり、実際に被爆をされた方が少なくなっている今。今年96歳になられた築城さんの、語りを始めたきっかけも、被爆をした人が少なくなってきたからだそうです。

戦争が起きていた事実は、絶対に忘れてはいけない。長崎へ行って学んで知れたことを、家族や友達にこれからも伝えていきたいです。

私に出来ること

松戸市立河原塚中学校 1年

吉田 心美

1945年8月9日午前11時2分にとっても強力な原子爆弾が投下されました。快晴だった長崎の街は姿を変え、黒い雨、黒い灰で埋め尽くされるのでした。人類史上2回目の核兵器で、それにより長崎の人口半分以上の儂い命が一瞬にして奪われました。今回、私は平和大使としてその戦争の恐ろしさ、実際に体験した入のお話を聞き、また長崎原爆資料館に行き自分の目で学びたいと思い参加させていただきました。

被爆体験講和では被爆当時18歳だった築城さんから普段では聞くことのできない貴重なお話しをして頂きました。とても生々しく、残酷な受け入れられない内容でした。家が全部無くなったり、頭からつま先まで血だらけで、みんなの顔は真っ黒、真っ赤になっていると聞き、とても恐ろしい気持ちになりました。

20 × 20

た。今は当たり前前に私たちは勉強ができてい
るけど、当時はしたくても出来なかったと聞
き、改めて勉強に前向きに取り組もうという
気持ちにもなりました。

長崎原爆資料館では実際に当時着ていた服
、被爆した方の写真、当時のままのものなど
を実際に自分の目で見て、経験してないけど
原爆投下の様子が鮮明に浮かび上がりました。
特に印象的だったのは住時計です。時間を見
てみると被爆当時の午前11時2分で止まって
いました。私はこの時計が一瞬にして姿を変
えた長崎の街を物語っているかのように感じ
ました。

私は今回の平和大使を通じて、机の上で勉
強しているだけでは学べないことを五感を使
って学びました。中学生になったら必ずこの
平和大使に応募して平和公園の式典に参
加して学びたいと思っていたので、台風で式
典が中止になってしまって残念でしたが、沢
山学ぶことができたので友達や、家族に伝え

ていきたいと思いました。そしてその友達が
周りの友達や家族に伝えていけば、きっと戦
争や平和について考えることが増えていくと
思いました。まだまだ核兵器などの武器があ
ることも知って絶対に戦争はあってはならな
いと学びました。78年経った今でも悲しんで
いる人たちがいることを知って、戦争はいい
ことは一つもないので、二度と起こらないこ
とを願って、当たり前のことには感謝して生き
ていこうと思います。

長崎派遣を終えて、今思うこと

新松戸南中学校 3年

宇戸谷 茉瑚

私が平和大使として長崎に四日間滞在する中で抱いた感情は、ただひたすら「怖い」でした。私と歳が変わらない子たちが戦争のために働き、私たちの日常とかけ離れた生活をしていました。もし自分があの子だったら、と考えるだけでとても苦しかったです。

青少年ピースフォーラムで行われた被爆体験講話では、戦争のリアルを知りました。当時の人々の混乱は、私の想像をはるかに超えるものでした。

二日目、三日目には原爆資料館に行き、目で見て、手に触れ、さまざまな角度から原爆についての知識を深めることができました。原爆の熱線により溶け、変形したソーダ瓶は原爆投下から78年がた。た今でも、当時の被害の大きさを物語っています。また、実際に触ることができ、貴重な体験となりました。

私がこの四日間で、自分の生活がいかに恵まれているのかを気づかされました。はっとしたのは、戦時中、学生だった方から発せられた「勉強したかった」という言葉。当時の学生は国のために働き続けるしかありませんでした。一方で、今までの自分を振り返ってみると、「勉強めんどくさい」と不満ばかりであることに気づきます。78年がたち、勉強させてもらえる私たちは何を学ぶべきなのか改めて考えなければいけないと思いました。

今もまだ、世界に平和は訪れていません。戦う、殺す、その選択の無意味さに、一秒でも早く、一人でも多くの人に気づいてほしいです。1945年8月9日午前11時2分。この悲劇を繰り返さないために、過去の過ちを自ら学び、知らうとすること。これは私を含め、次世代を担う人々の責務であると思います。

最後に、このような機会をくださった関係者の皆様、本当にありがとうございました。

決して忘れてはならない夏の日

金ヶ作中学校 3年

越智 海成

私が長崎を訪れて、まず感じたことは「歴史を感じる美しい町並み」だということです。そのため、こんなに美しい町に原子爆弾が落とされたとは、とても信じ難いことでした。しかし、78年前の夏、長崎は一瞬にしてこの世の地獄と化したのです。

私がその事実を実感させられたのは被爆当時の地層を見たときのことです。そこには、爆風によって壊された瓦礫などが残されていました。遠い過去のものだと思っていたことがとても近くに感じたのです。さらに、平和案内人の方の

「ここで暮らしていた人は身元があか。てい
ないんだよ。」

という言葉聞き、なぜ、罪のない人がこんなにも残酷な方法で殺され、家族の元にすら帰れないのかと、とても胸が痛みました。

原爆資料館を訪れた際にも、衝撃を受けた展示がありました。それは原子爆弾による後遺症の展示でした。原子爆弾の本当に恐ろしいところは、被爆してからだとすることを改めて思いました。勿論、原子爆弾の爆風や熱も十分、恐ろしいものです。しかし、被爆後も、トラウマを負ったり、癌や白血病の危機に、現在もさらされ続けています。

だからこそ、原爆を世界で規制していく必要があるのです。

最近、世界では核兵器禁止条約が発行されました。しかし、日本はこれに批准していません。なぜなら、核の傘の下にいるからです。核保有国と核の傘に守られている国は核を抑止力にするために、それを廃絶させようとはしません。核抑止を完全に否定はしませんが、他国への不信感が高まり、それがいつか核戦争へと発展し、地球を滅ぼし得るとも私は思います。

もし今、あなた自身もしくはあなたの大切

な人が原子爆弾によって、命を奪われたらどうでしょうか。地球上の全ての人に一度、考えて欲しいです。これは、私が実際に長崎を訪れて感じたことですが、写真ではわかりません。空気の重さを感じました。「写真で見た」と過去のことはいえ、「実際に見た」のでは全く感じ方が違ってきます。みなさんも一度、被爆地を訪れて78年前の惨状を肌で感じて欲しいです。私たち、一人一人に出来ることはとても小さいかもしれませんが、しかし、力を合わせれば核廃絶は不可能なことではないはずです。一番駄目なことは、戦争や原子爆弾から目を背けて、「決して忘れてはならない夏の日」のことを風化させてしまうことだと私は思います。

当たり前かある幸せ

和名ヶ谷中学校 2年

藤川 真莉花

私は、8月7日から10日まで、平和大使として、長崎に行きました。そこで、戦争の悲惨さや、原爆の恐ろしさを再認識しました。その中でも特に印象に残ったことは、4つあります。

一つ目は、被爆後は水を求めていたということです。当時は原爆の影響で川の水が汚れていましたか、熱線を浴びた人々は水を求めるかあまり、その水を飲んでしまったり、何も飲めず亡くなってしまいう人が大勢いました。そのことから、平和公園に噴水が作られたり、原爆死没者追悼平和祈念館に水盤がたくさん作り来たそうです。

二つ目は、現在世界には原爆が一万二千五百二十個もあるということです。青少年ピースフォーラムでは、その数をビービー弾の音で表してくれました。ビービー弾の音が聞こ

える度に胸が痛みました。原爆などの核兵器の所持を禁じる核兵器禁止条約が発行された今、世の中では、核兵器は国を守るか壊すかということ意見が分かれています。平和祈念式典では、市長は、核兵器がある限り平和は訪れないと仰っていました。私もこの考えに賛成します。

3つ目は、当時は戦争を、自分たちの国が正義で、相手の国が悪であると教えられていたということです。被爆者である築城昭平さんは、当時は広島に原爆が落とされた事を仕方ないと考えていて、その時は空襲がなかった長崎にもいつかは来るだろうと思っていたそうです。もし今も国民全員がその考えであったらと考えると、恐ろしくて堪りません。

4つ目は、当時は戦争は悪いものだと考える人は少なかつたということです。築城さんが仰るには、戦争は自国が正義で、敵国が悪であると教えられていたそうです。世間の戦争に対する考えが変あってくれて良かったと、

心の底から思いました。

私は長崎に行ってから、「長崎を最後の被爆地に」という言葉の意味を、深く考えるようになりました。現地では分からないこともたくさんあり、とても貴重な経験ができました。

最初は平和であることを当たり前だと思いたくないと考えていました。しかし、平和を当たり前と思えるようになっていくことが大切だと思えるようになりました。

これから、長崎で学んだことを周りに共有して、より多くの人々が平和について考え直す機会を作れるように頑張りたいです。

78年前の想いも引き継いで

松戸市立和名ヶ谷中学校 2年

佐藤 衿花

今から78年前、8月9日の11時2分に長崎市の上空500mで原子爆弾が炸裂しました。これによる死者は73,884人、負傷者は74,909人にもなります。

なぜこんなに多くの数になったのか。原子爆弾は原爆のエネルギーが爆風50%、熱線35%、放射線15%でプルトニウムを用いたもので、通称「ファットマン」(ふと、ちゃん)

と呼ばれていました。投下された当時は地上にもう1つの太陽が現れたようで、人のは一瞬のうちに皮膚がたぎれ、生き残り、たがも未だにケロイドなどの後遺症が残り苦しんでいるといえます。被爆体験講話をしてくださった築城さんは腕などにケロイドがあり、投下される前に布団を全身に被ったため、命が助かると言いました。この1つの行動で生死に関わることもかとても恐ろしくなりました

た。

その後に行った戦争の擬似体験では自分の大切なものが次々になくなっていくことは現実味があり、当時の人の気持ちも少し重なったようでとても胸が痛くなりました。

他にも平和案内人さんによる長崎市内の散策、ここでは浦上天主堂遺壁の土台が爆風で折れたことに驚きました。青少年ピースフォーラムでは先ほび言、たものの他にこぶんまりファミリードワーフで行、た追悼平和祈念館では土くな、たことを想い常に水の音が聞こえ、様々な工夫が見られました。資料館では、11時2分で止まった時計、フットマンが造られていた映像や熱線を受けた瓦礫や竹など、心な苦しめらぬうなものが沢山あった。

私はこの4日間でも多くのことを学びました。最近の子は平和ボケをしているといふが、それは周りの環境が平和だとこの証拠だと思ふ。しかし、今もなお戦争が起こる。

いて苦しんでいる人がいること、過去にこの
ような絶望的な話があつたことは覚えていてほ
しい。この長崎派遣は私の人生においてとて
も貴重な経験です。私はその想いを胸に周り
の人たちに伝えていこうと思います。

長崎で学んだこと

松戸市立旭町中学校 1年

倉品 詩月

「どうしたら世界は平和になるのか。」

それは、この長崎派遣のテーマでもあり、私が平和大使になった動機でもありました。今回、実際に長崎に行ってみて、その答えが少し分かった気がします。それは、人々が「みんなの平和」を真剣に考えることです。

この四日間で見学した場所は、長崎県防空本部として使われていた立山防空壕。未来の平和を願い建てられた平和公園。爆心地。原爆により被災した山王神社。原爆資料館。かつての教室が記念館となった城山小学校でした。

二日目に参加した青少年ピースフォーラムでは、北海道から沖縄まで、年齢や学校もバラバラの平和大使たちと一緒に、平和について学習しました。その中でも特に印象的だったのは、ピースボランティアの方々と戦争の

疑似体験をしたときです。様々な大切なものや人が、戦争が激化するにつれて奪われていき、最終的には恐怖と苦しみだけが残るといふ絶望感に圧倒され、自分の中の戦争という悲劇が現実味を帯びました。「今日ここで知ったことを忘れないでください。伝えてください。」これは、ピースボランティヤの方々の最後の一言です。この何気ない一言は、私の心を奮い立たせました。私にはこの長崎の地へやってきた平和大使として、身が竦むような恐怖を、この人々の苦しみを、継承していく責任重大な使命があるのだ、と再認識させられたからです。今回見たり聴いたりした、人々の願い。それは、「平和な世界」でした。辛く悲しい過去はもう変えることはできません。しかし、未来は、今生きている人々のためのものです。だからこそ今、私たちが知り、伝え、未来を変えようと動かなければ、戦争の記憶は忘れさられてしまいます。戦争は、遠い昔のことでも、どこか遠い国のことでも

ありません。それどころか、日本では今もなお、稀に海で機雷が見つかることがあります。地球上から戦争が消えない限り、誰一人として他人事ではないのです。自分も当事者の一人であることを忘れず、誰かがやってくれるでなく、一人一人が今、行動すべきなのです。

「微力でも、無力じゃない。」

そうである限り、私は平和大使として平和の尊さを世界に訴えかけていきます。

平和の大切さ

小金北中学校 1年

本田 真理

私が平和大使長崎逃遣に応募したとき、かけは、姉が参加したことがあ、たからという軽い気持ちでした。長崎に行く前は、原爆について、たくさんの方が七くな、たけれど、昔の、過去の出来事であ、て、どこか、他人事のような認識でした。

実際に長崎へ行、て、全く違、たものに変りました。原爆資料館で見た写真や絵、被爆した物を見て、1歳にも満たない赤ちゃんの物や、大やけどを負、た人の物もあり、無差別にこんなことにな、てしまうのかと驚きました。平和案内人さんの案内で見た浦上天主堂の壁は爆風ですれてしま、ていて原爆の恐ろしさを感じました。同じく平和公園で見た原爆が投下された当時の地層を見たとき、地層の中にガラスやレンガが混ざ、ていて、人が生活していたのが伝わ、てきて、当時の

人々のことを考えると胸が痛くなりました。
また、青少年ピースフォーラムに参加し、ど
んなものがなくなるかという戦争体験をしま
した。そこでは、戦争がおこったと仮定して
大切なものがどんどんなくなっていき、特に
大切な家族もなくなり、残ったものは、わず
かな食べ物だけでした。この体験で、私の安
全で平和な日常は、戦争一つであらなくなり
なくなってしまう、とても貴重で大切なものな
んだと実感しました。被爆者の方の話を聞いて、
原爆や戦争の悲惨さを学びました。話の中
でも、被爆体験を語れる人が減っているた
め、今を生きる人々が原爆の悲惨さを忘れ、
また新たな被爆者をだしてしまうことにつな
がるのではないかと、それだけは絶対にさけ
なくてはならないことだと思いました。

私は、平和は貴重なものだから大切にしな
なくてはならないと感じました。ですが、現在
も世界には戦争などで私たちがあたりまえの
ように感じている平和な日常をおくれていな

い人がいるということは解決すべきことだ
と思います。ですが、戦争だけではなく、大
きな被害をもたらした長崎の原爆より威力のあ
る原爆が12520発も残っていることも解決すべ
き問題だ”と思います。解決しなければいつま
た長崎のような悲劇が起きるか分かりません。
ですが、平和祈念館でアメリカのオバマ元大
統領の折、た折りづるを見たことで、原爆を
投下した国であるアメリカが多く被害を生
んだことを認めたとが伝わり、平和へ向か
っていっていると感じました。私は第1回オ
リエンテーションで先輩大使の言っていた「直
接被爆者の方から話を聞ける最後の世代」とい
う言葉が頭からはなれません。直接話を聞く
ことができる最後の世代として、平和の大切
さを広めていくことが世界平和への第1歩だ
と思います。

伝えることの大切さ。

光英VERITAS中学校 2年

田嶋 孔賀

令和5年8月、台風6号が九州地方に迫る中でしたが、平和大使として長崎を訪れる事ができました。

現地では様々な被爆建造物を見学しました。最も印象的だ、たのは浦上天主堂遺壁が爆風によってずれていたのです。こんなにも大きく重そうな物が動かされてしまう事が起きたのかと気になり、帰宅してから詳しく調べてみると、双塔の高さは26メートル(ビル8~9階分に相当)、東洋一を誇る建築物で、その塔の上にあつた鉄筋コンクリート製の大きさ5.5メートル、重さ推計50トンの鐘楼も爆風にて滑落。そんな爆風が人をも襲つたのです。

今回被爆者として語ってくださった方も爆風を経験された方でした。爆心地から2キロメートルで被爆。その方は大学の寮で、少し

休もうと仮眠をとることにしたそうです。
午前11時2分、突然吹き飛ばされて壁に全身
を強打。気を失ったようで、しばらくしてか
ら目を開けるとき同時に「逃げなくては」と外
に飛び出したものの外は暗く、昼間なのに周
りがよく見えなかつたそうです。そんな暗闇
の中で鉢合あせになつた大学の友人の顔は顔
面血だらけ。「お前どうした、大丈夫か」と
叫ぶと「お前もいゃ」と言ふと、自分も身体
中が血だらけ。他の友人達も数人揃つて救護
所へ行き、皆横たわつて治療を受けていまし
たが、一緒だつたが友人は皆、息絶え、と
うとうとう一人に存りましたと話してくださりまし
た。

平和学習の中で、大切なものを一つ一つ
故していくという体験プログラムがあつたの
ですが、とても幸く、自分から切り取られて
いく感覚がとても嫌でした。それに、もし自
分が倒れるような事になつたら最後に何を思
うだろう。もし見送るしか残り人から大切な

人へのメッセージを託さねたさどうだろう。
そんなことを考えると、悲しくて怖くて、た
まらぬ気持ちになりました。

今世界にある原子爆弾の数は、推定1万2
千520個。疑似体験では、今現在あるであ
ろう原子爆弾と相当数のBB弾を箱からドラ
ム缶へ流し入れる時に生じる音で数の恐ろし
さを体験するのです。とても嫌な音が耳から
頭に響き続け、その時間が自分で予想してい
たよりも長いのです。恐ろしい時間でした。
そしてそれは、長崎に落とされたファットマ
ンの破壊力よりも、はるかに強い威力の爆弾
なのです。

今回の派遣では台風6号の影響で、8月9日
の平和祈念式典が中止になり、式典への参列は叶いま
せませんでした。残念でしたがだからこそ得られ
たものもありました。参列できないと知り、
それならばと今出来る限りのことを精一杯や
ろうと、感じようと、学びたいと働いたこと
により、より忘れない薄れないことに繋が

り、無念だが、たかそこそ僕の中で"は終わらずに続いていく"と感じていきます。

「戦争はやらないうちがよい」そう思えるように、この惨事を国内外に伝え続けることはとても重要です。原爆資料館や日本国内にあり写真や映像、文献、被爆遺構、故人を偲ぶ想い、そして語り継ぐこと。それらに自分の大切な人を重ね合わせて、感じて考えてもえたら、それこそ強い抑止力になるのではないのでしょうか。国が違えば考えも違いますが、大切なものに対する想いは同じであると信じて、伝え続けます。

同じ過ちをくり返さないために

専修大学松戸中学校 1年

小口 莉子

私は、今回の長崎派遣を通して、日常に、
潜む「核」のおぞましさについて深く感じと
ることができました。

思えば、私たちの世代は、核を知らず、戦
争を知らず、平和な世代なのでしょう。けれ
ども、だからこそ、平和がいつ、崩れるやも
しれません。

広島・長崎で使用された核によって、尊き
命を奪われてしまいました。そして、核は今
なお、多くの人々の心に深い傷跡を残してい
ます。

核をなくすため、私たちにできることは、
ないのでしょうか。長崎で学んだことは、決
して無駄ではなかったはずですが。長崎で学ん
だ、「核による脅威」。それこそが、人の心
を戦争に駆り立てているのではないか、と思
いました。

今まで、どうして核保有国が、核の使用を抑えてこられたのか。それは、被爆者による語り部などの訴えがあったに他ならない、と私は思っています。けれど、その語り部の方も、高齢の人が多くなっており、語り部を続けるのには限界があります。

今こそ、核の依存を脱ぎ捨て、平和へと歩を進めんとすべきだと、と思います。被爆者の言葉を聞き、核のおぞましさを世界に向けて発信してゆくことこそ、私たちにできることではないか、と考えました。

そして、「核」のない世の中を創り上げ、世界の恒久平和を目指していきたい、と思っています。

今回、私がこの派遣事業に応募した理由は世界における政情が不安定なこと、第二次世界大戦のような戦争がくり返される事を危惧したからです。

現に、今はウクライナ侵攻や、北朝鮮のミサイル発射などがおこなわれており、私たち

の生活にも、間接的にはありますが、影響がでています。

第三次世界大戦が起こらぬよう、「核のおそろしさ」を一から学び、それを多くの人に知ってもらうがため 私は長崎派遣に行くことを決めました。

私は同じ考えを持った人と意見を共有し合い、結束して、「核の廃絶」という問題に向き合わなければならないと、この長崎派遣の体験を通じて、改めて考えることができました。

派遣後の活動について

※学校から提供いただいた資料の一部を載せています

・発表



栗ヶ沢中学校 平山 優奈
令和5年9月1日（金）2学期始業式で全校発表



小金北中学校 本田 真理
令和5年10月12日（木）報告会で全校発表



第四中学校 千葉 皇毅
令和5年10月12日（木）しょうこうさい松香祭で全校発表



第三中学校 七條 圭都
令和5年11月15日（水）リモート集会で全校発表



和名ヶ谷中学校 藤川 真莉花
令和5年10月20日（金）華秋祭^{かしゅうさい}で全校発表

長崎平和宣言

以下、長崎市ホームページから抜粋

長崎平和宣言

「突然、背後から虹のような光が目映り、強烈な爆風で吹き飛ばされ、道路に叩きつけられました。背中に手を当てると、着ていた物は何もなく、ヌルヌルと焼けただけの皮膚がべっとり付いてきました。3年7か月の病院生活、その内の1年9か月は背中一面大火傷のため、うつ伏せのままで死の淵をさまよいました。私の胸は床擦れで骨まで腐りました。今でも胸は深くえぐり取ったようになり、肋骨の間から心臓の動いているのが見えます。」

これは16歳で被爆し、背中に真っ赤な大火傷を負った谷口稜^{すみてる}さんが語った体験です。

1945年8月9日午前11時2分、長崎の上空で炸裂した1発の原子爆弾により、その年のうちに7万4千人の命が奪われました。生き延びた被爆者も、数年後、数十年後に白血病やがんなどを発症し、放射線の影響による苦しみや不安を今なお抱えています。

谷口さんは6年前にこの世を去りましたが、生前、まさに今の世界を予見したかのような次の言葉を遺しました。

「過去の苦しみなど忘れ去られつつあるようにみえます。私はその忘却を恐れます。忘却が新しい原爆肯定へと流れていくことを恐れます。」

長期化するウクライナ侵攻の中で、ロシアは核兵器による威嚇を続けています。他の核保有国でも核兵器への依存を強める動きや、核戦力を増強する動きが加速し、核戦争の危機が一段と高まっています。

今、私たちに何が必要なのでしょう。

「78年前に原子雲の下で人間に何が起こったのか」という原点に立ち返り、「今、核戦争が始まったら、地球に、人類にどんなことが起きるのか」という根源的な問いに向き合うべきです。

今年5月のG7広島サミットでは、参加各国リーダーがそろって広島平和記念資料館を訪れ、被爆者と面会し、被爆の実相を知ることの重要性を自らの行動で世界に示しました。また、このサミットの成果文書である「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」では、「核戦争に勝者はいない。決して戦ってはならない」ということが再確認されました。

しかし、この広島ビジョンは、核兵器を持つことで自国の安全を守るという「核抑止」を前提としています。核抑止の危うさはロシアだけではありません。核抑止に依存しては、核兵器のない世界を実現することはできません。私たちの安全を本当に守るためには、地球上から核兵器をなくすしかないので。

核保有国と核の傘の下にいる国のリーダーに訴えます。

今こそ、核抑止への依存からの脱却を勇気を持って決断すべきです。人間を中心に据えた安全保障の考えのもと、対決ではなく対話によって核兵器廃絶への道を着実に歩むよう求めます。

日本政府と国会議員に訴えます。

唯一の戦争被爆国の行動を世界が見つめています。核兵器廃絶への決意を明確に示すために、核兵器禁止条約の第2回締約国会議にオブザーバー参加し、一日も早く条約に署名・批准してください。そして、憲法の平和の理念を堅持するとともに、朝鮮半島の非核化、北東アジア非核兵器地帯構想など、この地域の軍縮と緊張緩和に向けた外交努力を求めます。

地球に生きるすべての皆さん、一度立ち止まって、考えてみてください。

被爆者は、思い出すのも辛い自らの被爆体験を語ることで、核兵器がいかに非人道的な兵器であるのかを世界に訴え続けてきました。この訴えこそが、78年間、核兵器を使わせなかった「抑止力」となってきたのではないのでしょうか。

その被爆者の平均年齢は、今年85歳を超えました。被爆者がいなくなる時代を迎えようとしている中、この本当の意味での「抑止力」をこれからも持ち続けられるか、そして核兵器を廃絶できるかは、私たち一人ひとりの行動にかかっています。

被爆地を訪れ、核兵器による結末を自分の目で見て、感じてください。そして、世界中で語り継ぐべき人類共通の遺産ともいえる被爆者の体験に耳を傾けてください。

被爆の実相を知ることが、核兵器のない世界への出発点であり、世界を変えていく原動力にもなり得るのです。

私は、両親ともに被爆者である被爆二世です。「長崎を最後の被爆地に」するため、私を含めた次の世代が被爆者の思いをしっかりと受け継ぎ、平和のバトンを未来につないでいきます。

日本政府には、被爆者援護のさらなる充実と一日も早い被爆体験者の救済を強く求めます。

原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の意を捧げるとともに、長崎は、広島、沖縄、そして放射能の被害を受けた福島をはじめ、平和を希求するすべての人々と連帯し、「平和の文化」を世界中に広め、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くし続けることをここに宣言します。

2023年（令和5年）8月9日

長崎市長 鈴木 史朗

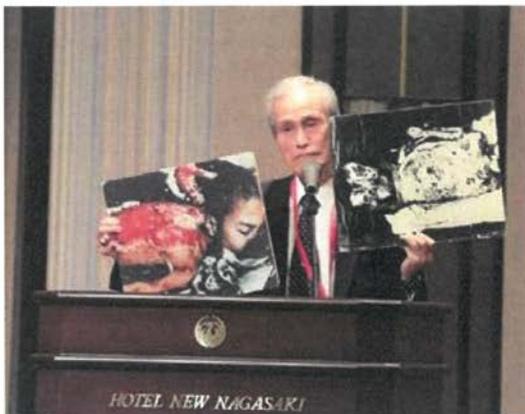
以下、長崎平和宣言（ことばの解説）から抜粋

ことばの解説

1 谷口 稜嘩

1945（昭和20）年16歳の時、自転車に乗って郵便物を配達中に爆心地から約1.8km地点で被爆。

1955（昭和30）年に被爆者団体「長崎原爆乙女の会（現：長崎原爆青年乙女の会）」の結成に参加。以後、長崎原爆被災者協議会会長や日本被団協代表委員を務めるなど、平和活動に携わり、国内外で核兵器廃絶を訴え、生涯をその活動に捧げました。2017（平成29）年8月死去。



2016長崎国際会議で証言する谷口稜嘩氏
（外務省提供）

2 放射線の影響

原爆による被害の特質は、大量破壊、大量殺りくが瞬時に、かつ無差別に引き起こされること、放射線による障害がその後も長期間にわたり人々を苦しめることにあります。

原爆による放射線障害は、急性障害と後障害に分けられます。急性障害は大量の放射線を浴びた時に出る症状で、嘔吐、下痢、発熱、皮下出血などを発症し、多くの人々が死亡しました。後障害は、被爆して数年から数十年してから現れる症状で、がんや白血病、白内障などがあります。1946（昭和21）年初めから、やけどが治ったあとに盛り上がるケロイドという症状が現れました。また、母親の胎内で被爆した胎内被爆児は出生後も死亡率が高く、死を免れても小頭症などの症状が現れる

ことがありました。さらに、1950（昭和25）年頃からは、白血病、甲状腺がん、乳がん、肺がんなど様々な病気の発症率が高くなり始めました。

放射線が年月を経て引き起こす影響については、未だ十分に解明されておらず、調査や研究が今も続けられています。

3 G7広島サミット

G7サミット（主要国首脳会議）とは、フランス、米国、英国、ドイツ、日本、イタリア、カナダの7か国及び欧州連合（EU）の首脳が参加して毎年開催される国際会議です。

2023（令和5）年5月に日本はG7議長国として初めて被爆地・広島でサミットを開催しました。

ウクライナ危機が長期化する中で核軍縮が大きなテーマとなった今回のサミットでは、ゲスト国としてウクライナのゼレンスキー大統領も参加しました。G7などの参加国首脳らは広島平和記念資料館を訪れ、被爆の実相に触れた後に、核軍縮に焦点をあてた初のG7首脳文書である「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」が発出されました。



4 核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン（広島ビジョン）

「広島ビジョン」は、核軍縮に焦点を当てた主要7カ国（G7）首脳による初の共同文書であり、広島・長崎原爆投下後の「77年間に及ぶ核兵器の不使用の記録の重要性」を強調したうえで、ウクライナ情勢を巡りロシアが繰り返す核兵器使用の威嚇を許さないとし、「核戦争に勝者はいない。決して戦ってはならない」ことを確認しています。

また、核兵器の役割が国を守るための抑止力であるとして、「全ての者にとっての安全が損なわれない形で、現実的で実践的な責任あるアプローチ」で核兵器のない世界を「究極の目標」として関与することを確認しています。

さらに、世界中の指導者や若者の広島、長崎への訪問を促すとしています。

5 核抑止

相手国が攻撃してきた場合、核兵器で反撃するという姿勢を見せることによって相手国の攻撃を思いとどまらせようとするのを、核兵器の抑止力といいます。核保有国の多くは効果的な核抑止力を維持しようと、核兵器の能力向上に励み、核兵器がいつでも使える状態に置き、相手への脅しを続けています。しかし、この抑止力が失敗したとき、あるいは事件や事故が起きた時、甚大な被害をもたらされる危険性があります。

6 核の傘の下にいる国

日本や韓国、NATO(北大西洋条約機構)に加盟する非核保有国は、いずれも核兵器は保有していませんが、アメリカの持つ核兵器の抑止力に依存している国々です。これらの国々を核の傘の下にいる国と呼んでいます。

これに対し、核兵器の抑止力に頼らない方法で国の安全を保障しようとする考え方もあります。長崎市は、その現実的で具体的な方法として、北東アジア非核兵器地帯構想(9で解説)を提唱しています。

7 人間を中心に据えた安全保障 (人間の安全保障)

人間の安全保障とは、人間一人ひとりに着目し、生存・生活・尊厳に対する広範かつ深刻な脅威から人々を守り、それぞれの持つ豊かな可能性を実現するために、保護と能力強化を通じて持続可能

な個人の自立と社会づくりを促す考え方です。

東西冷戦が終わった1990年代、環境破壊を含めて一人ひとりの人間への脅威を考える「人間の安全保障」という考え方が生まれました。

そして、国連開発計画(UNDP)が出した1994(平成6)年の人間開発報告書「人間の安全保障の新次元」で初めてこの概念が公に使われました。

以後、様々な国際会議でも取り上げられるようになり、「人間の安全保障」は地球規模の課題に取り組む上での重要な概念として、国際社会の認識が深まっています。

8 核兵器禁止条約

核兵器は一旦使用されれば、取返しのつかない甚大な被害を人間や環境に与えます。それは戦争での使用だけでなく、核兵器が存在する限り、誤って使われたり、テロなどに使われたりする危険性があります。核不拡散条約(NPT)で約束された核軍縮が進まない状況に不満を持つ国々の間で、核兵器を法的に禁止しようとする動きが、2010(平成22)年頃から強まりました。

そのような核兵器を持たない国々の主導のもと、三度にわたる核兵器の非人道性を考える国際会議の開催などを経て、2017(平成29)年7月、国連加盟国の6割を超える122か国・地域が賛成し、核兵器禁止条約が採択されました。

条約の前文には「被爆者の苦しみと被害を深く心に留める」とあります。被爆者の「私たちの経験をもう、誰にもさせたくない」という願いを国際社会がしっかりと受けとめました。

しかし、採択されただけでは、条約は力を持ちません。本当に力を持つためには、それぞれの国の議会等が国内法にしたがって条約を認め、締結する意志を最終的に決定しなければなりません。これを「批准」といいます。

2020(令和2)年10月24日、批准した国が発効要件の50か国に達し、その90日後の2021(令和3)年1月22日に発効(国際法として効力を持つこと)しました。

ことばの解説

なお、条約は締約国（条約に正式に入った国）らが話し合う会議を定期的を開催することを定めています。第1回締約国会議は2022（令和4）年6月にオーストリア・ウィーン市で開催され、核兵器廃絶への決意を示す「宣言」と、条約の実現に向けた「行動計画」が採択されました。第2回締約国会議は2023（令和5）年11月27日～12月1日にアメリカ・ニューヨーク市で開催予定です。

9 北東アジア非核兵器地帯構想

地域の国々が条約を結び、核兵器の製造、実験、取得、保有などをしないと約束した地域のことを「非核兵器地帯」といいます。

条約によって核戦争の危機をなくし、国際的な緊張をやわらげることで、核兵器の役割を減らし、核保有国が核兵器を開発したり、保有したりする動機をなくしていくことにもつながります。

地球の南半球は、1967（昭和42）年のラテン・アメリカ核兵器禁止条約のほか4つの条約（南極条約、南太平洋非核地帯条約、アフリカ非核兵器地帯条約、東南アジア非核兵器条約）によりすでに陸地のほとんどが非核化されています。

北半球でも、1998（平成10）年にモンゴルの「非核地位」が国連で認められ、2009（平成21）年には中央アジア（ウズベキスタン、タジキスタン、キルギス、トルクメニスタン、カザフスタン）非核兵器地帯条約が発効しています。

「北東アジア非核兵器地帯」には、日本と韓国と北朝鮮の3か国を「非核兵器地帯」にしようとするものなどがあります。

条約が実効力を持つためには、3か国に核兵器が存在せず、近隣の核保有国（アメリカ、ロシア、中国）が、3か国を核兵器で攻撃をしないと約束することが必要になります。

「朝鮮半島の完全な非核化」が明記された2018（平成30）年の米朝共同声明などを活かしつつ、地域国間の信頼醸成を図り、北東アジア全体の平和を実現するために日本政府が果たすべき役割は大きいといえます。

北東アジア非核兵器地帯構想



世界の非核兵器地帯はこちら

10 平和の文化

国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）が提唱した平和を構築するための考え方のひとつです。その理念は、ユネスコ憲章の前文に「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と明記されています。

世界には多様な文化や生活様式などがあります。こうした違いが分断を生み、それを力で解決する「戦争の文化」ではなく、相手の立場に立って話し合ったり交流したりしながら、お互いの理解を深め、信頼を築いていく「平和の文化」を育てることが大切です。



平和の文化

長崎市「平和の文化」ロゴマーク

歴代平和大使名簿



～ 歴代平和大使名簿 ～

年度	No.	氏名	(学校名)
平成二十年度 (二〇〇八年)	1	熊川 実旺	(第四中 2年)
	2	別宮 賢治	(第五中 2年)
	3	渡邊 ちさと	(六実中 3年)
	4	片野 結依	(小金南中 1年)
	5	清水 のどか	(古ヶ崎中 1年)
	6	藤井 彩乃	(新松戸南中 2年)
	7	清水 健人	(金ヶ作中 1年)
	8	神部 莉奈	(新松戸北中 2年)
	9	山本 拓実	(旭町中 3年)
	10	黒木 若葉	(聖徳大学附属中 1年)
平成二十一年度 (二〇〇九年)	1	川本 景介	(第一中 1年)
	2	鈴木 亜加里	(第二中 1年)
	3	小幡 祐太	(第三中 1年)
	4	山田 政明	(第四中 1年)
	5	清水 彬奈	(第五中 1年)
	6	久佐野 美奈子	(第六中 1年)
	7	増野 友梨奈	(小金中 2年)
	8	井山 陽菜	(常盤平中 2年)
	9	小林 美幸	(栗ヶ沢中 1年)
	10	熊川 大揮	(六実中 1年)
	11	高島 里夏	(牧野原中 3年)
	12	西 志穂	(河原塚中 3年)
	13	工藤 颯人	(根木内中 1年)
	14	四家 明宜	(金ヶ作中 1年)
	15	児島 一華	(和名ヶ谷中 1年)

年度	No.	氏名	学校名
平成二十二年 度 (二〇一〇年)	1	櫻井 和奏	(第一中 2年)
	2	吉田 彩乃	(第二中 1年)
	3	三橋 若奈	(第三中 1年)
	4	笹本 幸輝	(第四中 2年)
	5	比嘉 祐哉	(第五中 2年)
	6	後藤 奈穂美	(第六中 1年)
	7	神部 ちひろ	(小金中 2年)
	8	田中 萌加	(常盤平中 1年)
	9	高梨 望	(栗ヶ沢中 2年)
	10	岸田 穰士	(六実中 2年)
	11	大山 祭	(小金南中 1年)
	12	渡邊 誠嗣	(古ヶ崎中 2年)
	13	梶浦 美樹	(牧野原中 2年)
	14	斉藤 温人	(根木内中 1年)
	15	富永 由也	(河原塚中 1年)
	16	石井 拓海	(新松戸南中 2年)
	17	中川 剛志	(金ヶ作中 1年)
	18	向田 美紀子	(和名ヶ谷中 3年)
	19	山本 ありさ	(旭町中 2年)
	20	新倉 花菜	(小金北中 1年)
	21	田村 陽香	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	染谷 日向子	(専修大学松戸中 1年)



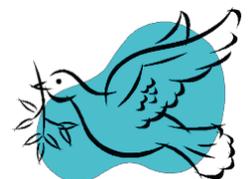
年度	No.	氏名	(学校名)
平成二十三年 度(二〇二一年)	1	佐藤 萌加	(第一中 2年)
	2	発地 空介	(第三中 1年)
	3	岸 健太	(第四中 1年)
	4	宗像 未来	(第五中 1年)
	5	天野 七海	(第六中 1年)
	6	紙崎 莉緒	(小金中 2年)
	7	井山 祥樹	(常盤平中 2年)
	8	加藤 円来	(栗ヶ沢中 1年)
	9	鈴木 理花子	(六実中 3年)
	10	坂本 実優	(小金南中 1年)
	11	谷口 茉奈美	(古ヶ崎中 1年)
	12	對馬 あい子	(牧野原中 2年)
	13	山田 真平	(河原塚中 2年)
	14	新垣 峻太	(新松戸南中 3年)
	15	水谷 春来	(金ヶ作中 2年)
	16	長谷川 結友	(旭町中 3年)
	17	板倉 日向子	(小金北中 1年)
	18	張 敏	(聖徳大学附属女子中 2年)
	19	平野 瑞帆	(専修大学松戸中 2年)

年度	No.	氏名	学校名
平成二十四年 度(二〇二二年)	1	阿部 秀大	(第一中 2年)
	2	茂出来 美樹	(第二中 3年)
	3	小澤 美羅	(第三中 3年)
	4	笠原 卓斗	(第四中 1年)
	5	播磨 渚生	(第五中 3年)
	6	内海 渚	(第六中 1年)
	7	大津 みちる	(小金中 3年)
	8	小俣 さやか	(常盤平中 1年)
	9	佐藤 優海香	(常盤平中 1年)
	10	阿部 裕美	(六実中 1年)
	11	宮本 龍一	(小金南中 3年)
	12	樋口 杏	(古ヶ崎中 1年)
	13	高橋 あみ	(牧野原中 2年)
	14	遠藤 未羽	(根木内中 2年)
	15	後藤 陽	(河原塚中 1年)
	16	鈴木 里歩	(新松戸南中 2年)
	17	岩崎 いぶき	(和名ヶ谷中 1年)
	18	伊藤 梢	(和名ヶ谷中 3年)
	19	紀藤 颯斗	(旭町中 1年)
	20	川村 香奈美	(小金北中 1年)
	21	石井 そら	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	中山 皓一郎	(専修大学松戸中 1年)



年度	No.	氏名	(学校名)
平成二十五年度 (二〇一三年)	1	藍原 由梨奈	(第一中 1年)
	2	河野 圭吾	(第二中 1年)
	3	福田 友郁	(第三中 2年)
	4	旗谷 幸亮	(第四中 1年)
	5	宮島 健吾	(第五中 3年)
	6	後藤 美菜	(第六中 3年)
	7	関川 美海	(小金中 2年)
	8	金澤 春樹	(小金中 1年)
	9	阿部 雅治	(常盤平中 3年)
	10	中澤 有稀	(栗ヶ沢中 2年)
	11	加藤 一紗	(六実中 1年)
	12	島田 悠	(小金南中 1年)
	13	大久保 愛深	(古ヶ崎中 1年)
	14	緑間 喜子	(古ヶ崎中 1年)
	15	毎熊 和正	(牧野原中 2年)
	16	猪瀬 柊斗	(牧野原中 1年)
	17	奥野 智朗	(河原塚中 3年)
	18	平野 茜	(新松戸南中 1年)
	19	下藤 誉司	(和名ヶ谷中 1年)
	20	新倉 拓真	(小金北中 1年)
	21	郡司 萌	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	星 さりあ	(専修大学松戸中 1年)

年度	No.	氏名	学校名
平成二十六年 (二〇一四年)	1	布川 恭大	(第一中 2年)
	2	白井 悠生	(第二中 2年)
	3	松本 優樹	(第二中 2年)
	4	本間 宏明	(第三中 2年)
	5	旗谷 吏紗	(第四中 3年)
	6	宮島 加奈子	(第五中 1年)
	7	植田 聖杜	(第六中 2年)
	8	合田 健太郎	(小金中 2年)
	9	早崎 諒	(常盤平中 2年)
	10	小井土 瑠冴子	(栗ヶ沢中 1年)
	11	望月 優衣	(六実中 3年)
	12	片野 玲奈	(小金南中 1年)
	13	和田 晴人	(古ヶ崎中 2年)
	14	對馬 悠介	(牧野原中 2年)
	15	井手 麟太郎	(根木内中 2年)
	16	樋口 明日香	(河原塚中 1年)
	17	斎藤 龍秀	(新松戸南中 1年)
	18	久保田 美咲	(和名ヶ谷中 2年)
	19	紀藤 菜桜	(旭町中 1年)
	20	渡邊 龍	(小金北中 1年)
	21	野中 利悦	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	築田 真理子	(専修大学松戸中 3年)



年度	No.	氏名	(学校名)
平成二十七年 度(二〇一五年)	1	服部 叶汰	(第一中 1年)
	2	瀬谷 恭平	(第二中 2年)
	3	長谷川 勇矢	(第三中 2年)
	4	朝生 蘭	(第四中 1年)
	5	田島 歩夢	(第四中 3年)
	6	佐藤 駿太	(第五中 1年)
	7	小林 優人	(第六中 2年)
	8	山下 優月	(第六中 2年)
	9	田崎 和	(常盤平中 1年)
	10	須藤 巧	(小金南中 1年)
	11	萩原 真央	(小金南中 1年)
	12	大久保 敦康	(古ヶ崎中 1年)
	13	倉重 はるか	(古ヶ崎中 2年)
	14	清水 智也	(牧野原中 2年)
	15	木村 史来	(牧野原中 1年)
	16	吉田 真帆	(河原塚中 1年)
	17	飯銅 千尋	(和名ヶ谷中 2年)
	18	井上 未来	(旭町中 2年)
	19	島岡 里帆	(小金北中 1年)
	20	藤井 友紀	(聖徳大学附属女子中 2年)
	21	山田 佳那	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	福島 有香	(専修大学松戸中 3年)

年度	No.	氏名	学校名
平成二十八年 度(二〇一六年)	1	梶原 望音	(第一中 1年)
	2	新井 しほり	(第二中 2年)
	3	山本 遥香	(第三中 2年)
	4	大住 春紀	(第四中 1年)
	5	埴 悠莉乃	(第五中 1年)
	6	三橋 世那	(第六中 1年)
	7	山崎 夏海	(小金中 2年)
	8	千葉 京香	(常盤平中 1年)
	9	須藤 未来	(小金南中 1年)
	10	坂本 聖	(小金南中 2年)
	11	相馬 結子	(古ヶ崎中 1年)
	12	中村 莉子	(古ヶ崎中 1年)
	13	水谷 寛樹	(牧野原中 1年)
	14	工藤 翼	(根木内中 1年)
	15	長田 結	(根木内中 2年)
	16	吉田 香凜	(河原塚中 1年)
	17	板橋 来美	(新松戸南中 1年)
	18	中川 和泉	(金ヶ作中 1年)
	19	本田 真樹	(和名ヶ谷中 2年)
	20	羽坂 美柚	(聖徳大学附属女子中 2年)
	21	白石 優美香	(専修大学松戸中 1年)
	22	星名 優歩	(専修大学松戸中 2年)



年度	No.	氏名	(学校名)
平成二十九年 度(二〇一七年)	1	高橋 聖奈	(第一中 2年)
	2	中木 源	(第二中 3年)
	3	見城 希音	(第三中 1年)
	4	角田 結菜	(第四中 1年)
	5	旗谷 優衣	(第四中 1年)
	6	伊藤 姫那	(第五中 1年)
	7	西田 翼	(第六中 1年)
	8	岡村 タイニー 美波	(小金中 1年)
	9	橋本 尚紀	(小金中 3年)
	10	小池 彩華	(常盤平中 2年)
	11	林 隆正	(栗ヶ沢中 1年)
	12	永野 礼華	(小金南中 2年)
	13	村田 和航	(古ヶ崎中 3年)
	14	榎田 朱里	(牧野原中 1年)
	15	北山 風香	(河原塚中 1年)
	16	スッティブン 凜	(河原塚中 1年)
	17	戸田 美智華	(新松戸南中 1年)
	18	田中 みなみ	(金ヶ作中 1年)
	19	佐藤 古都	(和名ヶ谷中 2年)
	20	松本 歌子	(和名ヶ谷中 2年)
	21	中村 葵	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	堀越 菜々	(専修大学松戸中 3年)

年度	No.	氏名	学校名
平成三十年 度(二〇一八年)	1	並木 康輔	(第一中 1年)
	2	藤井 拓真	(第二中 2年)
	3	織田 舞衣子	(第三中 1年)
	4	安藤 聡真	(第四中 2年)
	5	林田 唯雫	(第五中 2年)
	6	南畝 亜美	(第五中 3年)
	7	高橋 ヒカル	(第六中 2年)
	8	國崎 沙和子	(小金中 2年)
	9	犬尾 まり花	(常盤平中 1年)
	10	佐瀬 綾乃	(六実中 1年)
	11	堀本 大雅	(小金南中 1年)
	12	大木 悠広	(小金南中 3年)
	13	堀越 春生	(古ヶ崎中 1年)
	14	北原 早春香	(根木内中 1年)
	15	平 水音	(河原塚中 2年)
	16	藤田 隆良	(新松戸南中 2年)
	17	小山 杏奈	(金ヶ作中 1年)
	18	森田 和佳奈	(金ヶ作中 1年)
	19	飛田 美紅	(和名ヶ谷中 1年)
	20	島岡 凜	(小金北中 1年)
	21	富田 愛夢	(小金北中 3年)
	22	関野 七海	(専修大学松戸中 2年)



年度	No.	氏名	(学校名)
令和元年度 (二〇一九年)	1	藤井 星空	(第一中 3年)
	2	新井 はるの	(第二中 3年)
	3	小川 ひなた	(第三中 2年)
	4	小島 未来	(第四中 3年)
	5	福士 莉奈	(第五中 3年)
	6	齊藤 光咲	(第六中 1年)
	7	小林 大起	(小金中 2年)
	8	小川 新九朗	(栗ヶ沢中 1年)
	9	肥田 友稀	(六実中 1年)
	10	瀬川 千寛	(小金南中 3年)
	11	相馬 理子	(古ヶ崎中 1年)
	12	高橋 柚希乃	(古ヶ崎中 2年)
	13	猪瀬 響樹	(牧野原中 3年)
	14	澁谷 亜依	(根木内中 1年)
	15	蒔野 拓朗	(河原塚中 3年)
	16	佐藤 達弥	(新松戸南中 2年)
	17	清水 啓乃介	(金ヶ作中 1年)
	18	松本 虎太郎	(和名ヶ谷中 2年)
	19	小川 陽翔	(旭町中 1年)
	20	八木原 弓賀	(小金北中 2年)
	21	西川 叶美	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	江本 彩乃	(専修大学松戸中 1年)

年度	No.	氏名	(学校名)
令和4年度 (二〇二二年)	1	田中 雅	(第一中 3年)
	2	松本 大和	(第二中 2年)
	3	高橋 拓実	(第三中 1年)
	4	西山 みなみ	(第四中 2年)
	5	武田 真央	(第五中 1年)
	6	紅田 純怜	(第六中 1年)
	7	國崎 美和子	(小金中 3年)
	8	福井 健人	(小金中 2年)
	9	臼井 絢音	(常盤平中 1年)
	10	山口 侑馬	(栗ヶ沢中 1年)
	11	佐瀬 怜奈	(六実中 2年)
	12	阿部 尚平	(小金南中 2年)
	13	中山 香乃	(古ヶ崎中 1年)
	14	岩田 大和	(牧野原中 3年)
	15	依田 千尋	(河原塚中 2年)
	16	武 茉友花	(河原塚中 3年)
	17	岡田 隼	(金ヶ作中 3年)
	18	山岡 友梨子	(金ヶ作中 1年)
	19	藤原 穂華	(和名ヶ谷中 2年)
	20	佐藤 一翔	(専修大学松戸中 1年)





令和5年度
平和大使長崎派遣事業
報告書

はばたけ千羽鶴
平和という名の
青空へ

松戸市
総務部総務課

令和5年12月発行